

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例
-------	--------------------------------

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

高知県土佐市

○学校名

土佐市立戸波中学校

○学校のURL

<http://www.kochinet.ed.jp/hewa-j>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学1学級 【特別支援学級】2学級 【合計】5学級

○児童生徒数

【全生徒数】62人

(内訳：1年生22人、2年生18人、3年生22人)

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校教育目標】

・基本的人権を尊重し、個性を伸ばさせ、自主・自立の精神に満ちた生徒の育成

【人権教育目標】

・人権・部落問題学習を推進し、子どもたちの未来を保障する。

<教育指標>

・「ぬくもり」「たくましさ」「誇り」

○人権教育にかかる取組の全体概要

戸波中学校区では、早くから同和教育への取組が行われてきた。「同和教育の総和は、進路保障である」と言われており、本校も1998年度から2000年度までの3年間の高知県教育委員会指定の「同和地区児童生徒学力向上推進指定事業」に保育・小学校・中学校・児童センター・市民センターと共に取組み、3年間で多くの成果を上げてきた。

この取組を終わらせず、引き継いでいくことになり「戸波の未来を戸波の子どもたちに」を合言葉に、保護者、保育園・学校（小・中）、地域が一つになって戸波の子どもを育て、地域全体の心のつながりを深め、あったかな戸波の町づくりをしていくために1997年に設立された「戸波あったか教育推進会議」で継続して取組んできた。

さらにこの取組みを推進し強固なものにしていくために、3年前から文部科学省指定の「人権教育総合推進地域事業」への取組を進めてきた。

3. 特色ある実践事例の内容

○取組のねらい・目的

本校の生徒たちの中には、不登校傾向の生徒や低学力、人間関係でのつまずき等の課題があり、それを克服するためには、自尊感情や自己肯定感の高揚が大切であることから、取組むことにした。

○取組の内容

(1) 調査研究のテーマ

『まなび』『ぬくもり』『つながり』を地域ぐるみで創る
～保・小・中・家庭・地域の確かな連携をめざして～

(2) 調査研究の内容

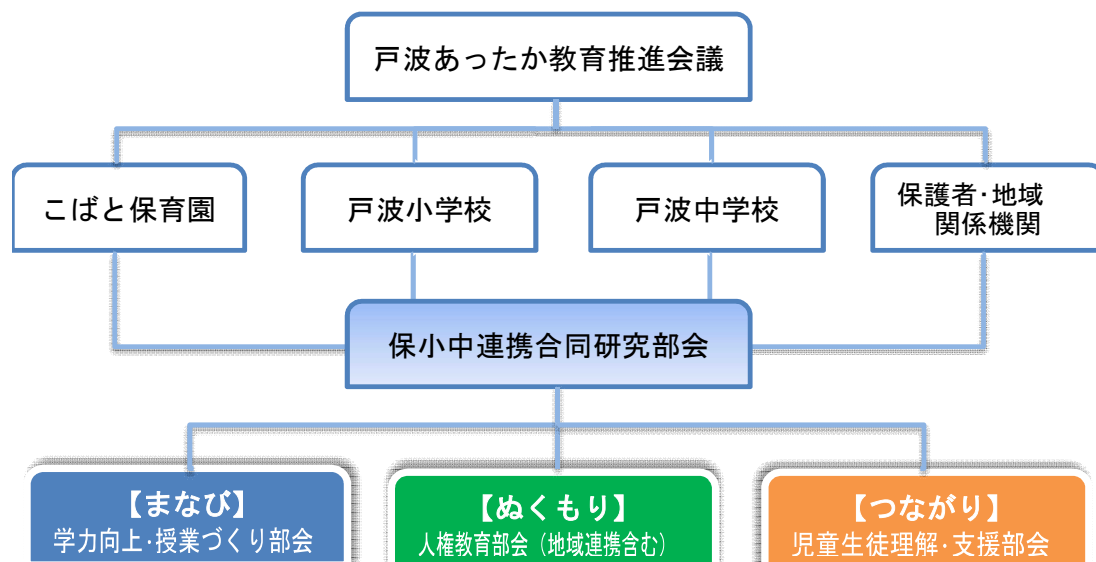
○戸波あったか教育推進会議の更なる活性化

- ・研究の全体像及び年間計画等の協議、確認を行う。
- ・地域ぐるみ『ふれあい事業』の推進をする。
- ・地域や保護者に教育・保育機関として、共通の目線で今まで以上の連携を図る。

○保小中連携合同研究部会の更なる充実

- ・保育園、小学校、中学校における連携を基盤とした具体的な教育内容研究の協議、実践を行う。（『まなび部会』『ぬくもり部会』『つながり部会』）
- ・各校園における校務分掌の連携を中心とした取組みを推進し、園児児童生徒の実態を的確に捉え、共通した“ものさし”で生徒指導・授業づくり・教科指導を共有する。

(3) 推進組織体制



■ あったか教育推進会議事務局会議

<教職員をつなぐ>

- ・事業全体の企画・運営をコーディネートする。 ・保小中関係機関合同職員会
- ・教職員のフィールドワーク ・戸波ブロック人権教育研修会

■ 保小中連携合同研究部会

<学校をつなぐ>

- ①まなび部会（学力向上・授業づくり部会）

- ・授業改善 ・基礎学力の定着と学力向上 ・主体的な学習の創造
- ・学習規律の確立 ・授業評価 ・家庭学習の定着 ・先進地視察

②ぬくもり部会（人権教育部会）

- ・人権教育の推進 ・人権総合学習の推進 ・特別支援教育の推進
- ・地域ぐるみ教育の推進 ・15年間の人権教育カリキュラムの作成
- ・人間関係づくり（「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」、あったかアンケートの実施・分析）

③つながり部会（児童・生徒理解、支援部会）

- ・生活指導 生徒指導・集団づくり（児童生徒理解を含む）・保健安全教育

■ 園児・児童・生徒をつなぐ行事の設定

<子どもをつなぐ>

- ・クリーンキャンペーン ・人権ふれあい運動会 ・戸波ハート祭
- ・人権もちつき大会 ・部活体験（中学校） ・体験入学（中学校）
- ・1日入学（小学校） ・保小交流学习 ・職場体験（中学校）
- ・わくわくタイム ・あったかタイム

■ 学校・家庭・地域の連携（ふれあい事業）

<学校・家庭・地域をつなぐ>

- ・クリーンキャンペーン ・保小中一斉参加週間 ・子育て学習会
- ・ソフトバレー戸波カップ ・戸波ハート祭 ・あったかカレンダー
- ・学習会、行事、懇親会を通して、職員相互交流を深める。

4. 実践事例の実績、実施による効果

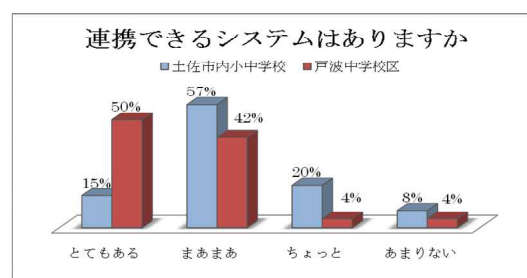
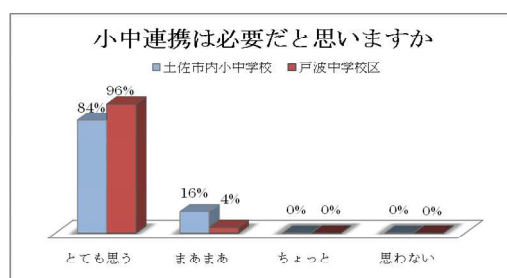
調査研究の成果

①調査研究により得られた成果

【教職員をつなぐ】

本年度は、年度初めの合同職員会・合同研究部会（4／13）では、昨年の総括をもとに本年度の取組内容について協議した。また本年度の人事異動により新たに加わった教職員とのつながりを少しでも早くもつため、保・小・中・関係機関の者が一堂に会して交流したことは、大きな成果と言える。

また、「ブロック人権研修会」では、戸波中学校区の教育の歴史について、当時の戸波地区の状況や先生方の教育への取組や先生方の子どもにかける思いについて学び合うことができた。これまで戸波の人権を大切にする取組に直接関わってきた先輩から学ぶ研修会として、昨年に引き続き実施できたことは大きな成果であった。「2011年度小中連携についてのアンケート」（土佐市教育研究所調べ）では市内全体と比較して、戸波中学校区では教職員の連携について意識化やシステム化が深化してきていることがわかる。（下のグラフから）



【学校をつなぐ】 <保・小・中合同研究部会> 2011 年度の合同研究部会総括報告書より

○まなび部会（学力向上・授業づくり部会）

■交流した内容

授業研をととした交流／標準学力調査の分析（夏休み）
／戸波小体育の授業（中→小）

■成果

中学校授業研で中1生徒の成長を確認し合えた。
先進地（佐賀県）視察のビデオを小中ともに視聴し学べた。
お互いの授業研・授業後の話し合いに参加し、意見交換できた。
（小中互いの弱いところを指摘し、対策ができた。）

○ぬくもり部会（人権教育部会）

■交流した内容

授業研をととした交流／各校園の人権教育の年間計画の交流
／部落史学習の中学校・小学校の重点教材の分担

■成果

合同で会をもつことで出口を意識できる。
小6・中1の授業をととして、子どもの様子や変化を確認できた。
15年間の人権教育のカリキュラムの作成ができた。

○つながり部会（児童・生徒理解、支援部会）

■交流した内容

4／13・・・保小中で気になる子どもの情報交換と共通理解
8／6・・・「学級集団の傾向を把握するためのアンケート」の結果も交え、
小6・中1生の情報交換

■成果

- ・直接、情報を共有することで、子どもや家庭への支援のあり方を意識できる。
- ・タイマー等を教室で利用することは、他の生徒にも有効である。

【子どもをつなぐ】

○あったかアンケートより

以下のグラフはアンケートを観点別（「学級の雰囲気」「友達との関係」「自己存在感」「授業への意欲」「教師との関係」）に全校で集計したものである。一昨年と昨年の比較なので、同じ子どもの比較とはならないが学校の傾向として分析した。各観点のなかには5つの項目の質問があり、児童はその内容に（4そう思う・3少し思う・2あまり思わない・1思わない）の4つの中から回答する。平均点の変化は、支援の効果を判断する1つの目安となる。

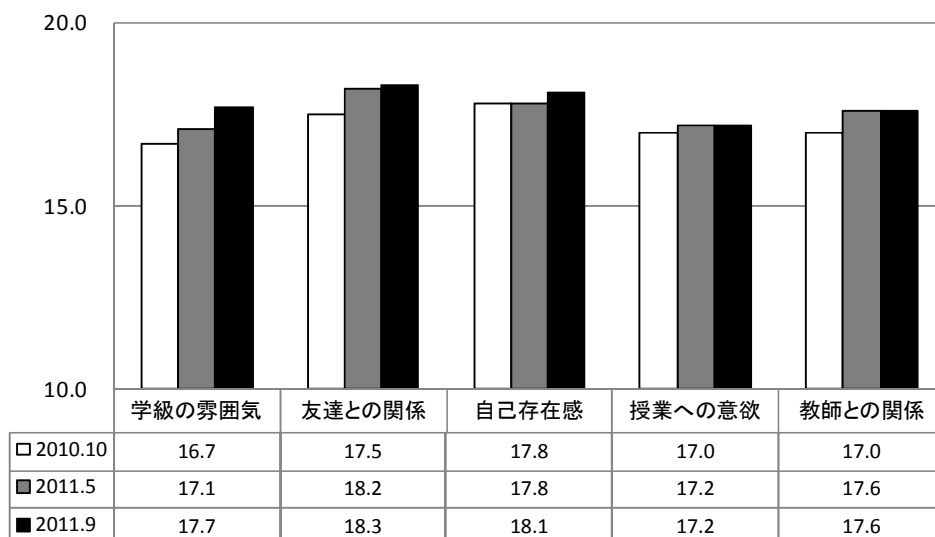
3回の観点別平均の推移を見てみると、全体的にはそれぞれの観点で高いポイントになっているといえる。

<各学年別の観点別推移>

課題が見られる項目については、学級経営を中心に取組を進めたり、学校全体での取組に生かしたりしてきた。その結果、少しずつではあるが、昨年から見

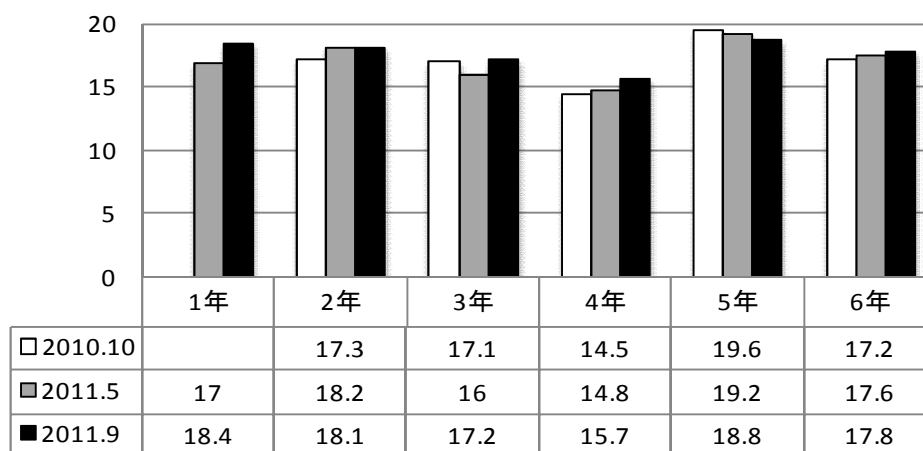
と改善が見えてきている。特に、「学級の雰囲気」「友達との関係」で成果が現れてきている。このことから、「あったかタイム」をはじめとした取組が少しずつ浸透し、子ども同士の関係が深化してきたものとなっている。

全校児童(2010～11年度)



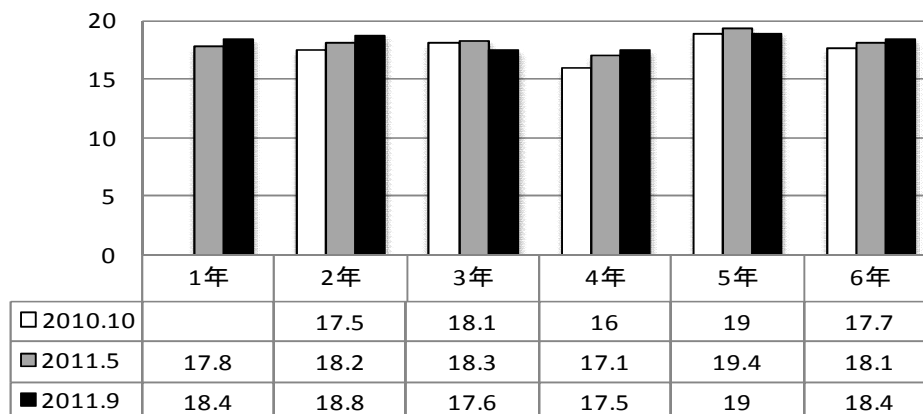
学級の雰囲気

※2010.10は前学年でのデータ



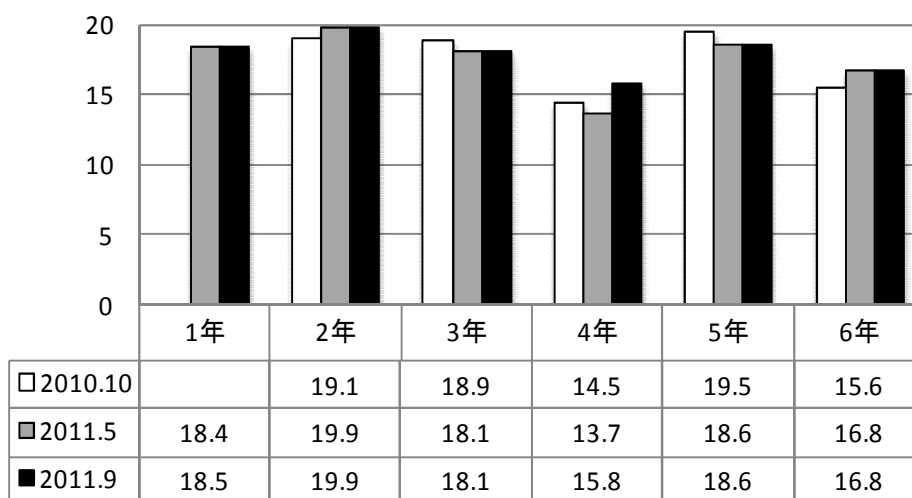
友達との関係

※2010.10は前学年でのデータ



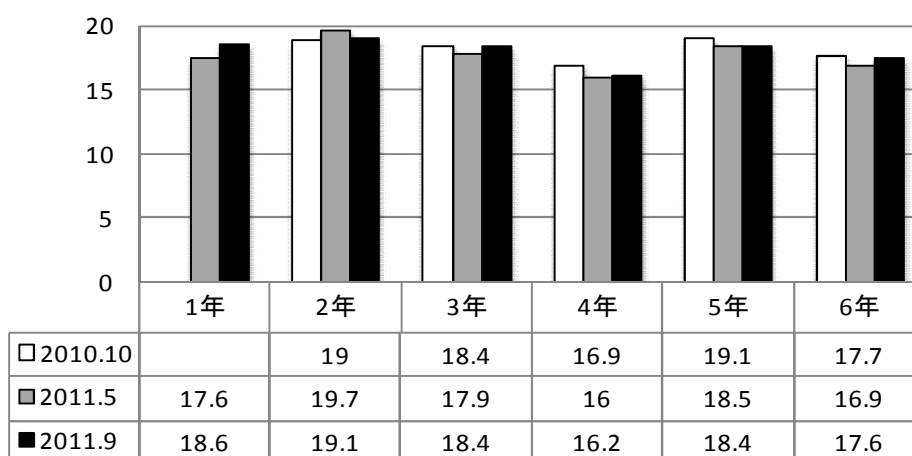
教師との関係

※2010.10 は前学年でのデータ



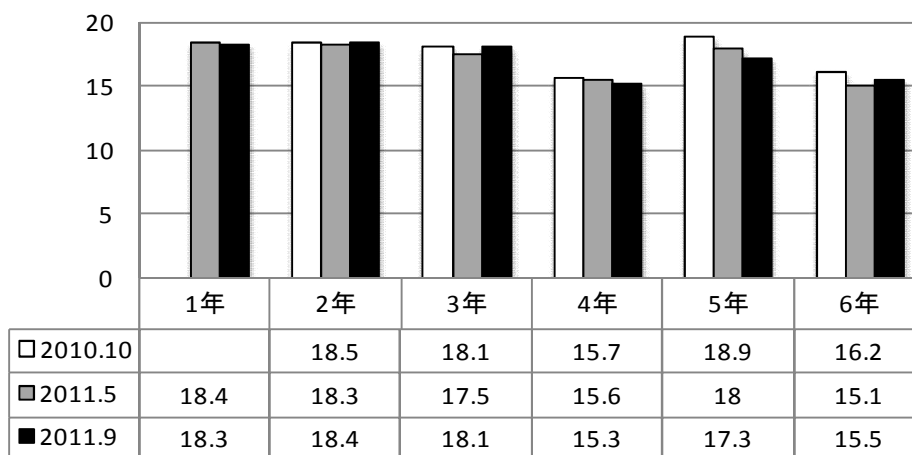
自己存在感

※2010.10 は前学年でのデータ



授業への意欲

※2010.10 は前学年でのデータ



【学校・家庭・地域をつなぐ】（ふれあい事業）

戸波地域でもひとり親家庭の増加や生活の貧困、地域のつながりの希薄化等、子どもを取り巻く環境が大きく変わりつつあり、地域全体で子どもたちの未来を考えていくことが急務だといえる。「子育て学習会」や「クリーンキャンペーン」「戸波ハート祭」など様々な行事をとおして、地域全体の心のつながりも深まりつつある。

5. 実践事例についての評価

■課題・見えてきたもの

- ・標準学力調査は平均のグラフ分析でなく、個々の伸びや課題を分析すべきであり、どこができてどこができていないかのデータ化をしていくことが望ましい。
- ・人権教育の視点として「今の自分とのかかわり」や「行動化」につなげていくことが大事である。（昔のこと、他人事で終わってしまわないようにすること）
- ・特別支援教育の学習会や教室環境の整備などで講師を招聘する時は保小中で声を掛け合っているだろうか。
- ・生徒理解の場（機会）をもう少し多くもてないだろうか。

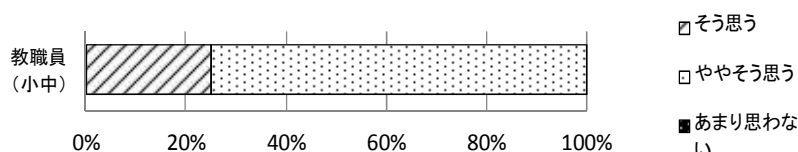
■今後の課題

①学校・家庭・地域のつながり

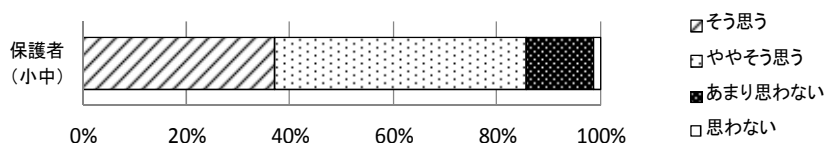
小・中学校のアンケートからは、教職員と保護者・地域の間での連携に関して、若干のズレが見られる。

学校を中心とした取組が保護者や地域に伝わりきっていないことや保護者の願いを受け止めきれていないことも考えられる。今後は、子どもたちの課題を今以上に共有し、より具体的な改善策と地域への情報発信に努めていかなければならない。

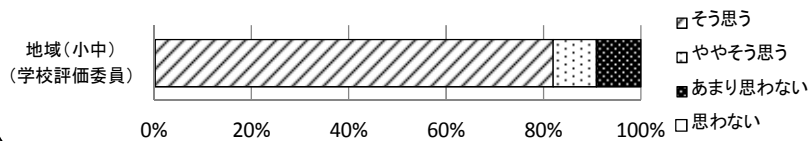
地域や保護者などの子どもを取りまく外部の存在を意識して教育活動を行っている



学校は子どもたちや保護者・地域の意見を聞き、その声を学校運営に反映していると思いますか



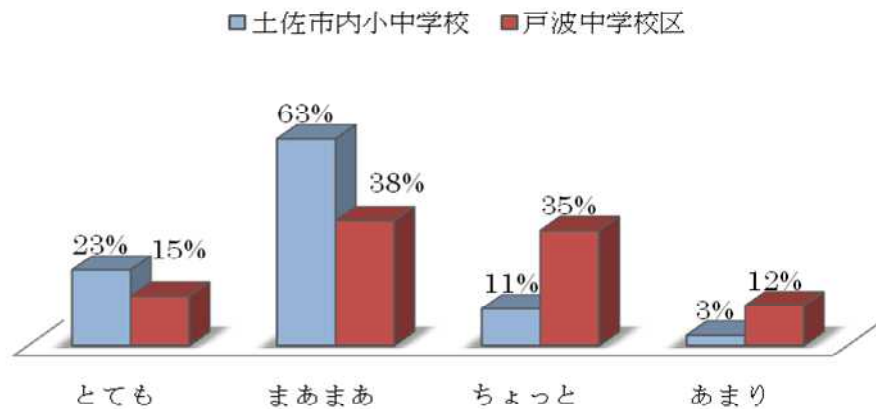
学校は学校や子どもたちの課題をオープンにし、保護者や地域住民と協力して解決できると思いますか



②教職員のつながり

前述の「2011 年度小中連携についてのアンケート」（土佐市教育研究所調べ）では市内全体と比較して、戸波中学校区では連携の必要性についての意識は高かったが、「意識して取り組んでいる」の項目では課題が見られる。今後は教職員一人一人の意識をどう高めていくのかが問われている。

意識して取り組んでいますか？



【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

土佐市立戸波中学校

子ども集団が15年間変わることのない中学校区での、保育園、小・中学校と家庭及び地域の確かな連携をめざす取組である。

特に、「学力の向上・授業づくり」「人権教育」「児童・生徒理解、支援」の三つの部会を設け、教職員が校種を超えて、共通した「ものさし」を持って進めていくことを大事にしている。これらの部会での活動は、保育園と小学校、小学校と中学校の接続を円滑にするとともに、義務教育終了時につけておきたい力を意識した取組をそれぞれの校種で進めていくことにもつながっている。また、学校や教職員相互の取組だけでなく、地域の特性を活かした「園児や児童・生徒をつなぐ」活動や、「学校・家庭・地域をつなぐ」活動も多彩に進められている。

「人権教育の推進に関する取組状況の調査結果について」では、家庭・地域との連携がまだまだ十分でないことや、校種間連携においても、複数校種を通じた一貫性のあるカリキュラムの作成が課題としてあげられているが、その解決法を考えるうえで参考になる。